幼児の友人関係（二）

高桑康雄

▽三△　幼児集団のダイナミックス（Ⅱ）

前節で田中熊次郎氏の研究にみたように、人為的に構成された小集団においては、幼児の間には排斥的な傾向が強い。しかし、このことも遊びの場面の力動性と関連させて考えることが必要である。

田中熊次郎氏が観察したところによると、「ぬり絵」「絵本」「すごろく」遊びで、無作為の三人グループにおいて発生した争いをみると、「すごろく」が男女とも最も多く、男子では以下「ぬり絵」「絵本」の順、女子ではその逆になっている。また、五人グループにした場合「すごろく」「積み木」「自由画」の場面での比較をすると、「自由画」が最も争いが少ない。このことについては「勝負を目的にした遊び」「遊具の数が制限されている場合」「順番が問題となる遊び」などの条件が競争を刺激するもの、と説明されている。

ここにいわゆるけんかが発生するのであるが、それは子どもの人格の形成過程における自我意識の発達に関連するものであろう。つまり自己を主張するひとつの形式としてけんかがあると考えてよい。

したがって、別の遊びの場面、とくに人為的に構成したのでなく自然に生起した場面では異なった事態がみられることになる。

さきにあげた奈良女子大学付属幼稚園の研究において、砂場での自然な結びつきの状態の中でみられる働きかけと反応が記録されているが、それによると（第2表、第3表）、まず働きかけでは、協調的な働きかけが半分以上をしめており、その内容からみると、依頼、協力などから、しだいに提案的な意味のものへと進んでいるという。それに対して、強圧的な働きかけは減少している。

第2表　働きかけ

年令＼項目	意識的			無意識的
	協調的	自己主張的	強圧的	
3才	50.0	28.3	19.7	2.0
4才	69.7	15.3	13.6	1.4
5才	57.9	23.8	12.6	5.7

第3表　反応

年令＼項目	反応あり				反応なし
	協調的		批判的	拒否的	
	消極的	積極的			
3才	50.8	18.6	3.4	18.6	8.6
4才	48.8	18.8	3.8	14.3	14.3
5才	45.7	23.1	6.4	20.1	4.7

一方反応についても、「反応なし」は減少し、交渉がなんらかのかたちで保たれるようになるが、とりわけ、自分の意志を表明するような内容が増加している、といわれている。たとえば、消極的協調にしても、許容・服従というものよりも、応諾・同意の意志表示をするものが増加し、積極的協調でも、提案・説明をふくむものが増加していると解説されている。批判的・拒否的反応の増加も表から読みとれるところである。

このように幼児の友人関係は、人為的に構成された集団の場合にも、自然に構成された場合にも自己主張の場として位置づけられている。そしてそこにみられる排斥的、あるいは協調的な行動様式は、幼児の場合、知り合いの者とそうでない者との差がきわめてはっきりしているということによるものであろうと思われる。

しかし、すでにいくらかふれてきたが、幼児の友人関係は単になかよし、なかわるというようにわりきることはできない。なかよしだからけんかをする、という場合もあるわけである。相互的な交渉をもつか、もたないか、という点が問題になるといえよう。

ところで、次にあきらかなことは、幼児たちを対等の関係だけでなく、支配―従属という関係においてもみなければならないことである。けんかにしても、ある場合には一方向的な「いじめ―いじめられる」意味のことがあるし、けんかが支配―従属の関係を決定することも多い。

以下幼児における支配―従属関係をみていくことにしよう。

小林さえ子・斎藤美智子両氏は、ぬり絵のさいにみられるリーダーシップ機能について研究している。この研究では、四人一組みのグループでぬり絵をさせるとき、画用紙面を四等分して各人がひとつずつ作業する「四等分図形」場面と、ひとつの絵に共同で作業する「統一図形」場面とで比較すると、前者では五才半以後、「他のメンバーとの交渉の言動に、優位劣位を意味することがない」「客観的なことばと動作」が増加しているのに、後者においては、リーダー的および従属者的言動が増加している。年令的には、四才半以後にそうした社会的言動が増している。このことから共同作業の場面では、社会的言動が促進される、といわれている。

支配―従属関係はこうした実験的に構成された集団の中よりも、自然の遊びの中にいっそうはっきりみられる。田中熊次郎氏が記録したところでも、幼稚園の子どもたちのあいだにこの関係が示され、従属的な地位の子どもは、支配的な子どものいうままに道具を運んだり、下働きをさせられて、なおかつそれに甘んじていることが説明されている。

支配的な地位に立つ子どもが身体も大きく、知的発達も早いことは一般に認められているが、遊具の所有関係がそこに反映していることも考えなければならないであろう。さらに年令的な階層関係の存在も認められるところである。

わたくしの手もとに提出された報告書によると、東京の下町、商業地区のある幼稚園で、その園庭にある四つのブランコが自由遊びの時間にどのように乗られ、そこにどんな人間関係が展開するかを、ある一日について調査したところ、ブランコ遊びをした三四人のうち、二年保育年長児一四名、一年保育児一六名で、二年保育年少児は三名、三年保育児は一名にすぎなかった。そうして、このほとんど独占している五才児組の中でも腕力の強い者が支配的であることも観察されている。

幼稚園の中ではこのような年長組の支配関係が存在する。しかし、もっと一般的にいえば、幼児たちは、さらに年長の子どもたちの集団に対して従属的な関係を保っている、と考えられる。幼児の友人関係をとりあげる場合、幼稚園・保育所などの中での問題ないしは同じ年令の子どもどうしの問題だけがとりあげられることが多いが、現実の生活においては、年長の子どもたち、とくにギャング・エイジの子どもたちの結びつきは多い。

鈴木道太氏が、自分の幼いころをひきあいに出しながらのべている「油っ子」（半人前）もそうであるが、この遊びなかまでの予備軍的な地位と役割りの中で、幼児たち自身の友人関係も構造化すると考えられる。

▽四△　家庭の保育態度と友人関係

すでに第一節にのべたように、幼児の友人関係は基本的には親の価値規準によって規制される。

石黒大義氏らは、幼児の社会性発達におよぼす家庭環境の影響について研究を発表している。この研究では、家庭環境を、(A)家庭内の雰囲気、(B)親との心理的接触、(C)親の養育態度「厳格さ」、(D)親の養育態度「民主的」の四項目から質問紙調査し、幼児の社会性を、(a)情緒安定性、(b)依存性、(c)協調性、(d)指導性、(e)攻撃性の五点、および、(f)生活習慣の自立について保育園の担任保母が評定し関連をみたものである。その結果、入園当初において特にいちじるしいことは、家庭内の雰囲気がよい場合、親との心理的接触が大である

場合、協調性が大であるということ、養育態度が厳格である場合、民主的である場合に生活習慣の自立が大であることなどである。この結果、家庭内の雰囲気が対人関係と関連が深い、養育態度が生活習慣の自立と関連する、とまとめている。

小嶋秀夫氏の研究は、親の子どもに対する態度・行動を愛情、強制（コントロール）の二つの側面から考え、その角度からとらえた親子関係と子どもの社会的行動との関係をあきらかにしようとするものである。

結果においてみられることは、強制に関してそれが弱いものは友人との言語的交渉においてすぐれ、なかまから受けいれられ、人気もある、という点である。これらは、強制されることの強い子どもたちとの間に統計的に有意の差を示している。

これらの研究はいずれも統計的な分析の結果から、親の保育態度が、その子どもの友人関係のありかたに影響を及ぼしていることを示している。

一方、米山久恵氏は攻撃的行動を示す幼児について考察しているが、家庭のしつけとの関連では、幼稚園児の場合、干渉型、甘やかし型の家庭に攻撃的幼児がみられ、保育園児の場合、放任および非合理的な厳格が攻撃的行動と関連がある、とみられている。同氏は、この一見矛盾している結論は、両者の家庭環境の一般的相違を計算にいれて解釈すべきであるとして、単純にしつけの型と行動との関係を考えることを警戒している。

このことをより一般的に考えれば、幼児の友人関係というものが、子どもたちひとりひとりの家庭の教育の反映であるばかりでなく、その地域の人たち全般の教育観およびそれを支えている経済生活そのものの反映である、といえよう。

▽五△　幼児の友人関係と保育施設

さきにあげた石黒大義氏らの研究においては、入園後三か月の保育によって、情緒安定性、指導性、依存性、生活習慣の自立などの点がめざましく改善されることが認められ、施設保育、集団生活の重要性がのべられている。同じように、小嶋秀夫氏もさきの研究において数例の事例研究を行なっており、保育園にあって約一年半ほどの間まったく不活発で社会化のおくれていた一女児を、治療的な目的で作られたグループに入れて特に指導した結果、行動に積極性がみられるようになった事例などを報告しており、集団生活の役割りを認めている。

こうした保育施設就園の効果を小学校入学時において不就園児との比較で検討したのが坂東義教氏の研究である。その結果によると、対人交渉の特性としては、就園児は友好的、信頼的で、かたくなでないが、協力性、おだやかさ、すなおさでは劣り、全体的には

より積極的、開放的である、といわれる。対人感情の面では、就園児の方が「ドライ」だと判断されているようである。

しかし、保育施設が望ましい友人関係形成の場となり、それをとおして人格の発達に好ましい影響を与えうるためには、単なる就園の有無だけでなく、保育の質的内容を考える必要がある。

三宅和夫・奥山わか子氏の観察によれば、一部の男児と教師との結びつきがかたく、他の者とのそれは薄弱である。しかも、子ども同士の結びつきは教師を仲だちとしてしだいに共通の関心や目的がうまれ、交渉ができあがっていくのだ、といわれる。とすれば、保育のありかたが社会化の質を決定することになろう。佐久間信子氏の研究はその点の資料を提供している。すなわち、三幼稚園を比較したとき、教師が幼児の行動への助力、是認、誘導を、葛藤を起こさせることなく行なっている園では、行動の規定、否定、制限などの接触の多い園においてよりも、子どもの遊びの場面は安定しており、孤立する頻数も少ないことがあきらかとなっている。

なお問題となることは、保育にあたって友人関係をとおして対人関係の技術だけでなく、正しい人間理解をどのように育てていくか、ということである。岸和子氏がその点に着目して実践している成果は、内容を紹介する余裕はないが参考とすることができよう。

× × × × × × × × × × × ×

Bühler, Ch., Hetzer, H. : Das erste Verständnis für Ausdruck im ersten Lebensjahr. Zsch. f. Psychol. 1928.
Moreno, J. L. : Who shall survive ? (rev. ed.) 1953.
Wisliczky, S. : Gruppenbildung in Kindergarten. Zsch. f. Psychol. 1928.
Green, E. H. : Group play and quarreling among preschool children. Child Development. 1933.
Blatz, W. E. et al. : Nursery education. theory and practice. 1935
Stern, E. : Drs Verhalten des Kindes in der Gruppe. Zsch. f. angewandte Psychol. 1923.

瀬川　良夫　児童の社会心理　金子書房　昭和二七
守屋　光雄　幼稚園児　金子書房　昭和二七
山下　俊郎　幼児心理学　朝倉書店　昭和三〇
波多野勤子　幼　年　期　光文社　昭和二六
田中熊次郎　児童集団心理学　明治図書　昭和三二
（幼児児童教育講座I）子供の生長　福村書店　昭和三〇
（子供の社会生活――田中熊次郎――）
守屋光雄他　子供の道徳　金子書房　昭和二七
（子供の喧嘩――田中熊次郎――）
岸　和子　幼児時代　麦書房　昭和三二
鈴木　道太　子ども会　新評論　昭和三〇
松村康平編　児童理解の方法　誠信書房　昭和三三
河原治子・斎藤美智子　幼児の社会性の発達に関する一研究　「児童心理学研究」創刊号　一九五九
石黒大義他　幼児の社会性――その発達に及ぼす家庭環境の影響――「日本福祉大学研究紀要」第二号　一九五八
坂東　義教　小学校の入学当初に見られる就園児と不就園児との差異に関する心理学的研究「北海道学芸大学紀要(第三部)」第八巻　一号　一九五七
奈良女子大学文学部付属幼稚園　遊具使用の場に見られる幼児の社会性「幼稚園施設研究」第五号　一九五六
三宅和夫・奥山わか子　幼児の社会的行動の発達に及ぼす成人（教師）の交渉の影響について「教育心理学研究」第三巻　第二号　一九五五
小林さえ子・斎藤美智子　幼児集団におけるリーダーシップ機能についての実験的研究「教育心理学研究」第五巻　第四号　一九五八
米山　久憲　幼児の攻撃的行動「教育心理学研究」第五巻　第四号　一九五八
小嶋　秀夫　親子関係と幼児の社会化「教育心理学研究」第七巻　第四号　一九六〇